

「2019年ベトナム国家大学ハノイ校サマースクール派遣参加報告書」

京都大学文学部4年 布浦康平

今回、このプログラムに参加したのは、異文化に触れることで何か得られるものがあるのではないかと考えたからだ。1週目は人文社会科学大学(USSH)、2週目は外国語大学(ULIS)で授業を受けたが、サポーター含め様々な学生と交流するなかで、異文化に触れるという個人的な目標は一定程度達成できたのではないかと感じている。それと同時に、現地の学生たちの手を借りて異文化に「触れる」だけでなく、現地で生活できるレベルにまで到達する、つまり異文化に「溶け込む」ことができれば得られるものがさらに大きくなるのであろうと思った。この点については、社会人として将来取り組んでみたい。海外を訪れることは初めてではないが、今回のサマースクールほど鮮烈に異文化を感じることはこれまでになかった。

プログラム内容としては、1週目のUSSHと2週目のULISで少し内容が異なる。USSHでは、ベトナム語を学ぶことはもちろんであるが、それよりもベトナムという国のことを学ぶことに重きがおかれていたように個人的には感じている。ULISは、ベトナム語を学ぶことに特化したプログラムであった。そして、どちらの大学でも合同発表の準備の時間が設けられていた。授業最終日に行われる合同発表に向けて準備を進める過程・発表本番では、USSH、ULIS、京都大学の学生が共同して課題に取り組むことができていると思う。発表は日本語で行うが、私達が普段何気なく使う日本語の表現はベトナム人にとって難しくないか、どう表現すれば伝わりやすいかということには心を砕いた。私が属していた班、他の班ともに良い発表ができたと感じている。

日本語を学んでいる学生であるとはいえ、USSH、ULISの学生の日本語運用能力の高さには驚きの連続であった。方や自分を振り返ってみると、中学校1年生から英語を授業で習っているというのに、カタコトの英語を話すのがやっとというレベルである。ベトナム語は言わずもがなである。ベトナム語の理解が不十分であるために苦労する場面は何度かあった。日本でベトナム語をもう少し勉強して行くべきであったというのは今回のサマースクールにおける個人的な反省点である。ハノイ滞在するにあたり、買い物で使う表現や移動するのに必要となる表現ぐらいは最低でも準備して行くべきであった。

今回のプログラムでは、授業をしてくださった先生方をはじめ、毎日色々な場所を案内してくれた学生、滞在先のホテルのスタッフなど様々な方々にお世話になった。特に、忙しいなかサポーターを務めてくれたUSSH、ULISの学生には感謝をしてもしきれない。2週間という短い期間であるものの、彼ら彼女らと育んだ友情を絶やさぬよう、さらに深めていけるよう努めたい。そして、彼ら彼女らが日本語でそうしてくれたように、いつか私が彼ら彼女らに対し、ベトナム語で日本を案内できるようになりたい。また、今回のサマースクールの期間だけでは、見る事・行く事・感じる事ができなかったベトナムの場所や文化もたくさんある。私も再びベトナムに行き、彼ら彼女らに会う機会を持ちつつ、それらの場所や文化に触れ、溶け込みたい。